

チーム女川と女川町、 8年間の軌跡

2022年4月



中央大学ボランティアセンター公認学生団体

チーム女川



目次

はじめに	2
第1章 災害時と現在の女川町について	3
第2章 チーム女川の活動記録	7
第3章 現地の方々から	11
cafe さくら 島貫 洋子 さん	11
大原南区 区長 成田 城太郎 さん	12
大原南区 副区長 雫石 直一 さん	12
マルキチ阿部商店 阿部 淳 さん	13
第4章 現役生と卒業生から	14
「チーム女川活動記念誌発刊に寄せて」 黒川 涼香 (2016年度法学部卒)	14
「チーム女川活動記念誌発刊に寄せて」 稲吉 華那 (2016年度理工学部卒)	14
「チーム女川での大切な経験」 日下部 真莉 (2019年度法学部卒)	15
「チーム女川での活動を振り返って」 新開 千聖 (2019年度代表、総合政策学部4年)	15
「私のボランティアとは」 菅野 ^{レオナルド} 励盛度 (2020～2021年度代表、商学部3年)	16
「チーム女川での3年間」 辻 七夕香 (2020～2021年度副代表、商学部3年)	16
「チーム女川でのボランティア活動を振り返って」 清水 幹太 (総合政策学部3年)	17
「チーム女川での活動を通して」 福間 寛之 (総合政策学部3年)	17
「ボランティア活動を通して」 中田 陸斗 (国際経営学部3年)	18
第5章 先生方から	19
「活動収束にあたって」	
中澤 秀雄 (法学部教授、2015～2020年度ボランティアセンター長)	19
「女川での活動を振り返って」	
大川 真 (文学部教授、2017～2018年度チーム女川顧問)	19
「チーム女川に関わる皆様への御礼」	
松本 真理子 (2013～2016年度ボランティアセンター コーディネーター)	20
「感謝の気持ちを記録誌に託して」	
開澤 裕美 (2015年度～ボランティアセンター コーディネーター)	20

はじめに

本冊子は、2011年3月に発生した東日本大震災で被害を受けた宮城県牡鹿郡女川町を支援する中央大学ボランティアセンター公認学生団体「チーム女川」の活動収束に際し、女川町の移り変わりの様子や、「チーム女川」のこれまでの活動記録をまとめたものです。震災当初から今までに渡る女川町の様子や、「チーム女川」の活動報告に加え、これまで「チーム女川」に関わって下さった住民の方、団体のOB・OGの皆様、現役メンバー、顧問の先生や、コーディネーターの方々からも「チーム女川」との関わりを振り返って頂きました。

本冊子の構成は5章から成ります。

第1章「災害時と現在の女川町について」では、震災当時から現在までの女川町の変化の様子を数値や写真を交えてまとめています。

第2章「チーム女川の活動記録」では、2013年より発足した「チーム女川」のこれまでの活動を、日にち・参加学生数・引率職員数・訪問場所・活動内容という項目で記録しています。

第3章「現地の方から」では、女川町でお世話になった住民の方々へ、「チーム女川」との関わりについてインタビューをさせて頂いたものを、そのまま掲載させて頂いております。

第4章「現役生と卒業生から」では、「チーム女川」の現メンバーと卒業生の皆様に団体での活動について伺いました。活動の転換期や活動の収束の決定など、団体のターニングポイントにおける学生の率直な気持ちを書きました。

第5章「先生方から」では、顧問の先生や、中央大学ボランティアセンターのコーディネーターの方から、「チーム女川」の活動について振り返って頂きました。

本冊子が、今まで「チーム女川」と関わって下さったの方々にとって団体の活動を振り返る記録集となり、今現在ボランティアをされている方々や、これからボランティアを始めようと思っている方々の一助になれば幸いです。またこの場をお借りして、これまでの活動や本冊子の作成にあたり、助成金という形でご協力を頂きました公益財団法人電通育英会に心より感謝申し上げます。

そして、女川町の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げるとともに、「チーム女川」のこれまでの活動にご理解とご協力を頂きましたことを心より御礼申し上げます。

第1章 災害時と現在の女川町について

第1章では、宮城県牡鹿郡女川町における震災当時の被害状況及び震災発生から2019年までの復興の様子を年表形式で記録したものです。なお、本誌掲載事項は我々チーム女川が掲載必須事項だと判断したものとなっており、必ずしも現地の動向を余りなく記録するものではありません。

<女川町の位置>



<女川町における震災の規模>

2011年3月11日(金)14時46分 地震発生
 地震規模 マグニチュード9.0 震度6弱
 最大津波高(15:35前後) 14.8メートル：港湾空港技術研究所調査
 浸水区域 320ヘクタール：国土交通省被災状況調査
 被害区域 240ヘクタール：宮城県発表

<建物被害>

住 家		非住家(倉庫など)	
総 数	4,411 棟	総 数	2,100 棟
全 壊	2,924 棟 (66.3%)	全 壊	1,394 棟 (66.4%)
大規模半壊	149 棟 (3.3%)	大規模半壊	36 棟 (1.7%)
半 壊	200 棟 (4.6%)	半 壊	54 棟 (2.5%)
一部損壊	661 棟 (15.0%)	一部損壊	147 棟 (7.1%)
被害なし	477 棟 (10.8%)	被害なし	469 棟 (22.3%)

<人的被害>

町人口	10,014名
死者（関連死）	569名(22名) 男性：244名、女性：325名
死亡認定者	257名 男性：89名、女性：168名
行方不明者	1名（女性1名）
確認不能者	4名
生存確認数	9,183名

<女川町年度別災害公営住宅完成戸数累計「2018年完成」>

年 度	完成累計	完 成 率
2012年	50	0.3%
2013年	1,351	8.5%
2014年	5,288	33.4%
2015年	9,812	62.0%
2016年	13,784	87.1%
2017年	15,415	97.4%
2018年	15,823	100%

<災害前後の変化>

	2010年	2011年
人 口	10,059	8,445
世 帯 数	3,868	3,428
保 育 児	228	143
小 学 生	473	373
中 学 生	257	212
高 校 生	166	104
医 療 施 設	7	3
医 療 技 術 者	116	60
事 務 所 数	656	191
従 業 者 数	5,737	2,637
魚市場水揚高	81.6億	16.8億
製 品 出 荷 額	335.1億	67.4億
観 光 客 数	696,005	39,565

<漁協女川町支所の生産高推移>

年 度	天 然	養 殖	生産高合計
2010年	715,794千円	3,803,951千円	4,519,745千円
2011年	313,433千円	68,797千円	382,230千円
2012年	337,088千円	1,698,142千円	2,035,230千円
2013年	629,899千円	3,180,151千円	3,810,050千円

<写真データ>

災害直後、2011年



2012年



2013年



2014年



2015年



2016年



2017年



2018年



2019年



2020年



2021年



第2章 チーム女川の活動記録

「団体理念（2019年度以降）」

- 継続的に交流促進の場を設け、住民と共に支え合いの輪を築く
- 住民の声に寄り添い、女川の今を発信する

＜2013年度 設立の経緯＞

チーム女川は、災害後に大きく変わってしまった女川町を学ぶだけではなく、学生が何かできたらという思いから2013年に生まれました。頻繁に現地へ行けない学生と現地の方々のニーズを考えながら、女川町や都内・大学内でチーム女川としての活動を始めました。

●2013年度

日 程	参加人数	内 容
5/24～26	学生27名 職員2名	女川町 スタディーツアー
8/9～11	学生6名 職員2名	女川桜守りの会 里山の整備活動
8/19～23	学生6名 職員2名	女川中学校 NPO カタリバ女川向学館 中学生への学習支援活動
3/20～25	学生8名 職員3名	女川町 スタディーツアー



スタディーツアー・夏



スタディーツアー・春

●2014年度

日 程	参加人数	内 容
5/23～25	学生 27名 職員 2名	女川町 スタディーツアー
9/2～4	学生 23名 職員 3名	防災学習ツアー
9/8～13	学生 6名 職員 2名	石巻・女川復興支援インターン
2/14～17	学生 13名 職員 1名	女川スタディーツアー
2/16～21	学生 6名 職員 3名	阿部長商店インターン
2/22～28	学生 6名 職員 2名	女川復興支援インターン



復興インターンシップ



スタディーツアー・冬

< 2015 年度 活動方針の転換 >

チーム女川は発足以来、住民の方に震災当時の状況や復興への歩みについてのお話を伺い、自分達の震災への知識を深め発信するというヒアリング活動を行ってきました。しかし「公営住宅に移ったことで、住民同士の交流が減った」という住民の方々の声を聞き、学生団体として自分たちができることを見つめ直しコミュニティ支援活動に踏み切りました。

● 2015 年度

日 程	参加人数	内 容
6/5～7	学生 24 名 職員 2 名	女川町 スタディーツアー
7/1～11	学生 10 名	中央大学 女川町写真展
7/25・26、 8/1・2	延べ 14 名	四の橋夏祭り 女川に関わる商品出品のお手伝い
8/16・22・23	延べ 11 名	麻布十番祭り 女川に関わる商品出品のお手伝い
9/6～12	学生 4 名 職員 2 名	女川町 女川町復興支援インターンプロジェクト
10/4・10/11	延べ 12 名	みなと区民祭り 女川に関わる商品出品のお手伝い
10/31・11/1	延べ 16 名	中央大学多摩キャンパス 白門祭 女川汁（さんまのすり身汁）の販売
2/28～3/5	学生 4 名 職員 2 名	女川町 女川町復興支援インターンプロジェクト
3/24～27	学生 4 名	女川町復興幸祭 2016 の運営の手伝い



スタディーツアー



四の橋夏祭り

●2016 年度

日 程	参加人数	内 容
6/3～6	学生7名	スタディーツアー
8/5～7	学生7名	四の橋夏祭り 女川に関わる商品出品のお手伝い
8/27・28	学生5名	麻布十番祭り 女川に関わる商品出品のお手伝い
9/11～14	学生7名	夏の活動
10/8・9	学生2名	みなと区民まつり 女川に関わる商品出品のお手伝い
10/22～23	学生6名	中央大学 ホームカミングデー 物産展、写真展
11/5・6	学生11名	中央大学 白門祭(多摩キャンパス) 女川汁(さんまのすり身汁)の販売
2/11・12	学生3名	イオンモール多摩平の森 物産展、活動パネル展
3/11～14	学生3名	春の活動



みなと区民まつり



白門祭

●2017 年度

日 程	参加人数	内 容
6/23～25	学生5名	新入生を対象としたスタディーツアー
8/28～9/1	学生3名	ヒアリング
12/25～27	学生1名	ヒアリング
2/14～17	学生6名	コミュニティ支援活動



物産展



夏活動

●2018 年度

日 程	参加人数	内 容
6/22～24	学生 13 名	新入生を対象としたスタディーツアー
8/7～9	学生 9 名	大原南区でのイベント活動、女川北区の事前調査
9/12～14	学生 6 名	2地区でのイベント活動、女川北区での戸別訪問、女川についてのスタディーツアー
12/23～24	学生 3 名	大原南区での戸別訪問活動
2/3～4	学生 1 名	2 地区での春活動に向けた事前調査
2/15～17	学生 5 名	2 地区での戸別訪問・イベント活動、スタディーツアー



夏活動



夏活動 アロマハンドマッサージ

< 2019 年度 活動の収束への意識 >

チーム女川の活動毎の成果や住民の方々の現状やニーズを見つめ直しました。多くの方々に支えていただきながら、メリハリのない活動はできません。チームとしての活動の収束を意識し、その中で最後に我々ができることをやり抜くという気持ちで決断をしました。決定に伴い、その報告、活動冊子の作成などの活動も始まりました。

●2019 年度

日 程	参加人数	内 容
5/2～4	学生 2 名	6 月活動に向けた女川北区長との打ち合わせ
6/28～30	学生 11 名	新入生のためのスタディーツアー、ヒアリングや訪問
9/11～14	学生 9 名	戸別訪問、イベント、ヒアリング
9/15～18	学生 9 名	戸別訪問、イベント、ヒアリング



夏活動



物産展

●2020 年度

春・夏活動共に中止

第3章 現地の方々から

『cafe さくら 島貫 洋子さん』



1 チーム女川と関わり始めたきっかけを教えてください。

▶▶今、私の手元に2013年に中央大学の学生の皆さんから頂いたお礼状と写真があります。当時1年生だったKさんやIさん達も良い相手と巡り会われてすでに結婚。もうあれから8年以上も経つのですね……。

私がチーム女川と関わるきっかけを作ってくれたのは中央大学の松本真理子さんでした。2011年の東日本大震災直後、仮設暮らしとなり、自宅で学ぶ場所を失った子供達のためにNPO法人カタリバが作った放課後スクール向学館。そこで真理子ちゃんと出会いました。そして、中央大学のみなさんに被災時のことを話すように頼まれたのが最初だったと思います。

2 チーム女川について印象に残っていることを教えてください。

▶▶チーム女川で印象に残っていることと言えば…当時2年生だったかしら…Kさんに仮設商店街「きぼうの鐘」にあった私の店でサンマすり身汁の作り方を教えたことがありました。短時間で一所懸命に覚えたKさん。発車ぎりぎりの時間まで頑張り、最寄りの浦宿駅まで真理子ちゃんに車で送って貰いました。そうしたらうちの店にキャリーバッグを忘れたことに気づき…たしか真理子ちゃんが4つ先の石巻駅まで車でそれを届けてくれたのですよね。懐かしい思い出です。

そして、学生の皆さん手づくりのサンマすり身汁が中央大学の学園祭で販売され、そこでの寄付金を桜守りの会の活動資金として送って頂いたのです。

本当にありがとうございました。

3 県外から大学生がボランティアとして何うことについてどう思いますか？（コロナ禍以前の印象についてお聞かせいただければと思います）

▶▶いろいろメディアが発達し、さまざまな情報がたやすく手に入る時代ですが、メディアは多くのことを取りこぼします。事実の見方にもバイアスがかかり、私たち現地のものとはかけ離れた情報が発信されることが多いですね。現地に来なければ判らないことは必ずあります。皆さんが被災地に心を寄せ、実際に現地に来てボランティアをしていただけたのは本当にありがたかったです。そして、娘よりも若い方々とお話が出来てとても楽しかったです。

4 チーム女川の活動終了についてご意見・ご感想などがあればお聞かせください。

▶▶とても残念ですが、若い方々との楽しい時間を頂けたのはとても嬉しかったです。

またいつか何かの形でつながる事が出来たら良いですね。今まで本当にありがとうございました。

これからも各地でさまざまな災害が起こるでしょう。是非、チーム女川で培った経験を元に、どんな形であるにせよ積極的に関わっていただけることを願っています。

『大原南区 区長 成田 城太郎さん』



1 チーム女川と関わり始めたきっかけを教えてください。
▶▶町役場の町民生活課か社協さんのどちらかからボランティアを受け入れてもらえませんかと要請を受けたと思います。

2 チーム女川について印象に残っていることを教えてください。
▶▶泊まりで女川に来てボランティアをしていたと思うんですが、宿泊費が大変だと伺い、集会所をお貸しして、そこで食事して、ゆぼっぽでお風呂に入ってみんな楽しそうにしてたのが印象的でしたよ。
お年寄りに寄り添った活動を沢山してもらい感謝しております。

3 県外から大学生がボランティアとして何うことについてどう思いますか？（コロナ禍以前の印象についてお聞かせいただければと思います）
▶▶新しい行政区ができたばかりで、あまり行事なども決まっていな中、ボランティアの方々の活動に随分と助けられて感謝しかないです。

4 チーム女川の活動終了についてご意見・ご感想などがあればお聞かせください。
▶▶コロナ禍で無ければ、行政区にお招きをして、これまでの活動の労をねぎらい、感謝状などお渡しをして、食事会をしたかったです。解散のお知らせをもらった時とても残念でした。
中央大学のチーム女川の皆さんのこれからのご活躍を心よりお祈りしています。

『大原南区 副区長 雫石 直一さん』



1 チーム女川と関わり始めたきっかけを教えてください。
▶▶区の役員会によって、区長より“チーム女川”への対応のお話がありました。今思いますと、目が見えないとは言え、至らない点が多々ございました。反省致して居る所でございます。

2 チーム女川について印象に残っていることを教えてください。
▶▶「老人と海」ではなく、イベントの交流の中では、“若者と老人”の方々が1つとなって、作品作りの姿や談話を楽しんで居る場面等、懐かしく思い出されます。同時に、学生さん方の一刻でも高齢の方々と接する一生懸命の心と優しさが感じられ、印象に残って居ります。

夏頃ですか？集会所に宿泊された時には、帰られる時には当然なこととは言え、整理整頓され、学生さんとは言え、これは理路整然には通じるものがあるのかな？と感じた事でございます。

3 県外から大学生がボランティアとして何うことについてどう思いますか？（コロナ禍以前の印象についてお聞かせいただければと思います）
▶▶若い方、学生さん方との交流は、お年寄りの方々にとっても、身体的活動の動機付けや脳への刺激にもなり、生きて行く楽しみで、希望の持てる長生きの目的にもなる事と思います。
コロナ禍さえなければもっと全国的に広がって発展出来れば良い事と思っております。

ボランティアの力とは寄り添えるメンタルな面においても、心が癒されるお互い様の精神でもあると思います。

例えば、この様な事は、介護のような話にも繋がる所でもあると思いますが、ポリティックな余り施策が届かない人々の所にも、ボランティア・NPO等が必要とされ広く展開される事を期待するものでございます。

4 チーム女川の活動終了についてご意見・ご感想などがあればお聞かせください。
▶▶ご質問とはズレますが「チーム女川」の活動終了との事、残念至極寂寥感でございます。

これから学生の皆さんは、世の中へ世界へ飛び立つ（コロナ禍の中）戦士となります。世界は紛争・対立が多極化複雑化して激しく政情も変わって行きます。（貧困・移民問題等で）大国日本では、多岐多様にわたり、政治・行政・司法等の改革が開かれます。

周辺諸国の動向も気になる所であります。社会生活者においても不安定要素が大きく依存している事と思います。技術開発、研究、外交、貿易等日本の柱となりますが個々人におかれましてはボランティア、チャレンジ精神で理想を追及してください。

覚悟とフロンティア魂を持って、ご活躍をお祈り申し上げます。これ迄ご交流、ご支援頂き深く感謝申し上げます。成文、悪筆にて御礼致します。以上でございます。

『マルキチ阿部商店 阿部 淳さん』

1 チーム女川と関わり始めたきっかけを教えてください。
▶▶東北復興応援販売会で東北応援団白金支部の皆さんに紹介されたのが初めてだったと思います。

2 チーム女川について印象に残っていることを教えてください。
▶▶どんな行動に対しても凄く一生懸命で、疑問に思ったことはなんでも聞いてくる素晴らしい団体と思いました。

3 県外から大学生がボランティアとして伺うことについてどう思いますか？（コロナ禍以前の印象についてお聞かせいただければと思います）

▶▶互いの勉強になるので県外からの大学生ボランティア参加はとてもいいことだと思っています。

4 チーム女川の活動終了についてご意見・ご感想などがあればお聞かせください。
▶▶最近ではコロナ禍で皆さんに接することができませんが、素晴らしい活動だと思っています。今後とも被災地域のための活動を応援しています。



第4章 現役生と卒業生から

チーム女川活動記念誌発刊に寄せて

2016年度法学部卒 黒川 涼香

初めて女川町へうかがったのは2013年5月でした。忙しい日々を送られている女川町の方々が、温かく迎え入れてくださったことを鮮明に覚えています。お世話になった方々へ恩返しをしたいという思いが、活動を始める一番の動機でした。しかし、年数度しか訪問できない大学生が、現地のニーズに合わせた活動をどのように展開するのかという壁にぶつかりました。そこで、我々が現地で見聞きし学んできた女川町の現状を発信することを目的として活動を開始しました。活動の継続は、日々変わりゆく現地のニーズに寄り添った活動を展開すべきと考え、後輩に強くお願いすることはしませんでした。その時々メンバーが現地の変化に合わせて“チーム女川”なりの活動を展開させていったのだと感じているところです。

活動収束に際し、何年にもわたりチーム女川の学生を受け入れてくださった女川町の方々に心より御礼申し上げます。至らぬところばかりの我々を温かく迎えていただいた皆さまとの時間はかけがえのない財産です。



チーム女川活動記念誌発刊に寄せて

2016年度理工学部卒 稲吉 華那

私が初めて女川町を訪れたのは、震災から2年が経過した2013年5月のことです。グレーの更地がどこまでも広がり、ここに人々の暮らしがあったことを想像することはとても困難でした。これから復興に向けて進んでいく女川町を多くの学生に伝えたいと思い、「チーム女川」を立ち上げ、スタディツアーの企画・運営や白門祭でのブース出店等を実施しました。

私は現在、建設コンサルタント会社で防災に関する計画の策定や防災訓練の運営を実施しています。女川町の皆様が自分のまちをより良くしよう、安心・安全な町を作ろうと努力されている姿を見て、私も防災まちづくりに携わりたいと思い今の仕事を志しました。地域の人に寄り添った技術者になれるようこれからも精進していきます。

最後になりますが、2013年から学生の訪問を受け入れてくださった女川町の皆様、大変お世話になりました。これからも皆様とのご縁を大切に過ごしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



チーム女川での大切な経験

2019 年度法学部卒 日下部 真莉



私は少人数ならではの温かい雰囲気や一人一人に重きを置く方針に魅力を感じチーム女川に入りました。活動を重ね女川町に赴く回数が増えるたびに女川町が好きになっていき、「私も女川町の役に立ちたい」という思いが強くなりました。2年生の時には代表を務めました。今までのチーム女川の活動方針を転換し、新しくコミュニティ支援という形でチーム女川の活動をスタートさせました。女川町の復興に私たちは貢献できているのかという悩みや葛藤を感じる日もありましたが、それをチームみんなで向き合っていくことや、何よりも女川町の皆様からの温かいお言葉に励まされ勇気をもらいました。

チーム女川のメンバーとして女川町で活動した経験は、私自身を成長させてくれた大切な経験です。チーム女川の活動で行った経験や活動で得たものを自信に、今後も様々なことに挑戦していきたいと思っています。

チーム女川での活動を振り返って

2019 年度代表、総合政策学部 4 年 新開 千聖



私がチーム女川に加入した 2018 年春は、団体がコミュニティ支援を開始して間もない時期でした。活動ノウハウが無い中、地域の方との対話を重視し、学生と地域の方との共通ビジョンを見つけていく日々が続きました。しかし年月が経つにつれ、団体が地域とどこまで関わり続けるかという課題が生じました。学生の話し合いのなかでキーワードとなったのは、チーム女川が理念として掲げている「支え合いの輪」です。理念を定めた当初は、復興住宅への入居が始まったばかりで近所に顔見知りがないという声を多く耳にしていました。しかし地域の変化とともに一人一人に繋がりが生まれたことで、地域全体の支え合いの輪が形成されていると判断し、活動収束の決断へ至ることとなりました。先輩方から受け継いだ活動を終えることは後ろ髪を引かれる思いでしたが、チーム女川が長期に渡り携わった成果としての収束と捉え、現在まで活動を続けられたことに達成感を感じています。

最後に、これまでチーム女川の活動を支えてくださった全ての方へ、心から御礼申し上げます。女川町の皆さまが温かな笑顔を向けてくださったことは、私にとってかけがえのない思い出です。これからも女川町を想い、関わり続けていきます。ありがとうございました。

私のボランティアとは

2020～2021年度代表、商学部3年 菅野 ^{レオナルド} 励盛度

私はチーム女川の最後を見届ける活動の中で、「私にとってのボランティアとは何か」の答えを求めました。今の私の答えは「繋がり」です。大学1年生の私はおそらく「支援」と答えたと思います。2020年3月コロナウィルスの感染拡大によって、オフラインをフィールドとしていた私たちチーム女川の活動は劇的に変化させられました。ボランティアチームとしての活動を多く制限されました。しかし私たちが活動を制限されている歯痒さを、女川町の方々は理解してくださり温かい言葉を掛けてくださりました。こうした状況の中、私たちに他者への「支援」は行えませんでした。しかし、「繋がり」はありました。思えば2019年の女川町へボランティア活動をしていた時も我々の支援活動に対する感謝や励まし・応援の言葉が私のボランティア活動の大きな支えでした。

最後にはなりますが、女川町の方々には大変お世話になりました。女川町の皆様の幸多く、末長いご繁栄をお祈り申し上げます。



チーム女川での3年間

2020～2021年度副代表、商学部3年 辻 七夕香

私は中高生のときに学校の研修プログラムで何度か女川町を訪れました。大学にも女川町と関わる団体があるということを知り、チーム女川を選びました。それまで私が行ってきた活動とチーム女川の活動内容は異なっており、チーム女川は住民の方同士のつながりをつくる「コミュニティ支援」を中心に活動を行っていました。現地のニーズに合わせて何をすべきか、悩んだときもありましたが、親しく接して下さった住民の方々に本当に感謝しています。

2019年秋頃から今後のチームの活動について議論をし始め、「学生ボランティアにできること」を考えた結果、活動終了という決断に至りました。住民の方々へ、活動終了のご挨拶をさせて頂いたとき、非常に残念だというお言葉をたくさんの方々から頂きました。代々の先輩方が培ってきたチーム女川と住民の方々をつなぐを強く感じました。

チーム女川は本年を持って活動を終了致しますが、たくさんの元気を頂き、お世話になった女川町に今後も足を運んでいきたいと思っております。



チーム女川でのボランティア活動を振り返って

総合政策学部3年 清水 幹太

私がボランティア活動に参加したきっかけは大学入学前から直接的に人の役に立つ活動に参加したいという漠然とした思いがあったからです。チーム女川が行っていた住民さん同士を繋ぐコミュニティ支援という活動は私のその思いに合致していました。しかし、2019年の秋活動まで私は東北地方にすら足を踏み入れたこともありませんでした。本当に受け入れてもらえるのか不安で、その分女川町で住民さんが快く受け入れてくださったことが非常に嬉しかったことを鮮明に覚えています。



また毎週団体のメンバーで集まって、どうすれば女川町に貢献できるか考えた時間や実際に女川町で活動した経験は、震災のみならず社会に対するまなざしの向け方を大きく変えるものでした。女川町のみなさん、ボランティアセンター職員の方々、先生方、団体メンバーの協力がなければできなかったことだと改めて実感するとともに感謝をお伝えしたいです。本当にありがとうございました。

チーム女川での活動を通して

総合政策学部3年 福間 寛之

私はチーム女川の一員としてかけがえのない3年間を過ごすことができました。新型コロナの影響で、私が女川町での活動ができたのは一年のみでしたが、その中でイベントや戸別訪問、ヒアリングなどを行い様々な方々とお話しする機会をいただきました。現地活動を通じて自分の知らなかったことを沢山学び、自分自身の知見や視野が広がるようになりました。



そして、現地での活動が難しくなってからもメンバーでチーム女川としての今後について議論を重ねました。全員で自由に意見を出し合いながらチームとして同じ方向に向かって最後まで活動を続けられたことは、私にとって大切な経験になりました。ボランティア活動は自分自身の成長にも繋がるということを実感し、今後もこのような機会があれば積極的に活動していきたいと思います。

チーム女川を暖かく受け入れてくださった女川町の皆様、並びに団体の活動を支えてくださった皆様、今までありがとうございました。

ボランティア活動を通して

国際経営学部 3年 中田 陸斗

チーム女川所属3年の中田陸斗です。僕は1年生の頃からこの団体に入らせていただき、様々な経験を得ることができました。今回チーム女川が活動を終了すると共に、先輩方が作り上げた団体が終わりを告げることに悲しさと嬉しさが混在します。

僕は3年間という期間では満足した活動は正直出来ませんでした。それでも活動を通して宮城県女川町という地域や震災のリアルを知ることができ、大変嬉しく思います。日常では体験できないこともあり、自分の人生の中で大切な時間を作れました。臆病な自分が勇気を持って新しいことにチャレンジした事は良い方向に繋がりました。チーム女川に関わってくれた皆様、共に活動してきた仲間へ感謝します。ありがとうございました。ボランティアが必要ない世界が来ることを願います。



第5章 先生方から

活動収束にあたって

中澤 秀雄

(法学部教授、2015～2020年度 ボランティアセンター長)



チーム女川の長年にわたる活動に敬意を表するとともに、受け入れて下さった女川の皆様に心より御礼申し上げます。私は最後の顧問として執筆しておりますが、困難な時期にチームを牽引頂いたのは文学部の大川真先生であることを特記します。前ボランティアコーディネーターの松本真理子が女川との人間関係を頼りにスタディツアーを始め、被災地と東京を結ぶ活動から、後半期は災害公営住宅での活動へと転換しました。震災から10年間で被災地を取り巻く状況が刻々と変化する中で、目標を再定義しながら現地の皆様との関係を構築してきた歴代リーダーとメンバーに拍手を贈ります。私個人としては、ごく初期に2度ほど引率した以外は学生に任せてきましたが、地域の皆様に学生を育てて頂きましたこと、重ねて御礼申し上げます。女川の皆様のご健勝を心より祈念いたします。

女川での活動を振り返って

大川 真

(文学部教授、2017～2018年度 チーム女川顧問)



私がチーム女川の顧問を引き受けたのは、間違いなく「生存者罪悪感」(survivor guilt) からであった。大学入学を契機に仙台に移り住み、東日本大震災も仙台で被災した。小さな尊い多くの命が犠牲となってしまったのに、なぜ自分が生き延びたのか。そういう「罪」のような意識は、震災後から始めた様々な被災者への支援活動に関わっていくことで正直に言えば、少し楽になっていった。私の方針としては書類上の付き合いだけではなく、実際に現地に足を運び、関係者に頭を下げ、また活動ではメンバーと一緒に笑い泣くというものであった。女川での活動では、スタディツアーからコミュニティ支援へその活動の範囲を広げてくれた日下部真莉さん、元田奈緒さんのお二人の活躍とリーダーシップには特に助けられた。また寡黙にひたむきに活動を続け、最後にはカラオケ大会や夏祭りにも呼ばれるようになった石山智弥くんにも頭が下がるばかりである。そのほか歴代のメンバー全員に心から感謝したい。そして大原地区の皆さん、お元気ですか。またお会いしたいです。どうかお元気で！

チーム女川に関わる皆様への御礼

松本 真理子

(2013～2016年度 ボランティアセンター コーディネーター)

これまで学生を受け入れてくださった女川の関係者の皆様には、感謝しかありません。本当に有難うございました。チーム女川の発足の経緯は、私が震災後女川で教育支援に関わっていたことから始まっています。2012年大晦日、中澤先生と会うために、一年半ぶりに女川から東京へ向かいました。そのときの「何ごとも無かったかのような」東京の様子に衝撃を受け、学生と東北をつなぐことができる大学ボランティアセンターのコーディネーターになることを決めました。外から来た学生に、いつも女川の方たちはありのままの姿を見せてくださいました。強く温かな女川と出逢ったことで、人生が大きく切り拓かれた学生たちがたくさんいます。「外から来た人間に何ができるのか」。その答えは見つかりませんが、学生が卒業後も災害支援などに関わる姿をみると、少し救われる思いがします。チーム女川を支えてくださった全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。



感謝の気持ちを記録誌に託して

開澤 裕美

(2015年度～ ボランティアセンター コーディネーター)

2015年に中央大学へ着任して以来、チーム女川は常にボランティアセンターや学生とともにありました。コバルトブルーの海、温かい女川の皆さんに触れることで、学生は一気に女川が大好きになりました。

2013年からこれまで、その時々状況により変化しながらも、女川と中央大学との関わりを続けることができたことは、いつでも温かく受け入れてくださった女川の皆さんのおかげであることは言うまでもありません。それぞれがお忙しい日常のなか、一緒に学生を育てていこうという皆さんの優しさに触れながら、送り出す私達はいつも感謝しかありませんでした。

黒川さん、稲吉さんから受け継いだバトン、代々の代表たちが形を変えながら悩みながらも引継ぎ、最後に活動を閉じるという選択をした現役生メンバー。彼らにとっては、本当に難しい決断だったと思います。コロナ禍もあり、ここ2年間は皆さんにお会いすることさえできずに活動を閉じることとなったことが残念で仕方ありません。ただ、このように活動の軌跡を記録として残せたことはとても喜ばしく、今後の何かの活動で役立つことを願っております。女川の皆さん、助成団体の皆さん、これまで応援してくださった多くの皆さまに改めて感謝申し上げます。



引用源

第1章

- ・女川町「復興まちづくり」

<https://www.town.onagawa.miyagi.jp/index.html>

画像引用元

第1章

- ・Mapion 都道府県地図「宮城県」

<https://www.mapion.co.jp/map/admi04.html>

- ・東日本大震災アーカイブ宮城 未来へ伝える記憶と記録

<https://kioku.library.pref.miyagi.jp/onagawa/>

- ・3がつ11にちをわすれないためにセンター

<https://recorder311.smt.jp/blog/12384/>

- ・女川町復興拠点写真

<https://www.town.onagawa.miyagi.jp/teiten.html>

チーム女川活動記念誌

著者・発行者 中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チーム女川

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

TEL 042-674-3487

Twitter @ chuo_onagawa

E-mail chou-volunteer-grp@g.chuo-u.ac.jp

HP <https://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/>

発行日 2022年4月



ミックス
責任ある木質資源を
使用した紙

FSC® C155710